

## 近世案内記における観光モデルコースの登場：貝原益軒著『京城勝覧』から見えるもの

著者	金 廷恩
雑誌名	日本研究
巻	41
ページ	73-102
発行年	2010-03-31
その他の言語のタイトル	The Birth of Itineraries in Edo Period Tour Guidebooks : An Exploration of Keijo Shoran by Kaibara Ekiken
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00000501">http://doi.org/10.15055/00000501</a>

## 近世案内記における観光モデルコースの登場

——貝原益軒著『京城勝覧』から見えるもの

金 廷 恩

はじめに

近世は、街道の整備と庶民生活の経済的向上にともない、単純な移動ではない、楽しむ旅が大衆化した時代であった<sup>(1)</sup>。武士は公務の合間に名所に出かけ<sup>(2)</sup>、農民は講を作って農閑期に寺社参詣に繰り出した<sup>(3)</sup>。町人も「心の儘に物見遊山に出」かけるのが遊楽であった<sup>(4)</sup>。旅の大衆化に関する具体例としてよく挙げられるのは、伊勢へのお蔭参りである。宝永二年（一七〇五）・明和八年（一七七二）・文政十三年（一八三〇）には、大規模なお蔭参りが発生し、三百万〜五百万人もの老若男女が伊勢を訪れたという<sup>(5)</sup>。信仰の旅か、遊楽の旅か、問題にされることがあるが、少なくとも自発的な行動であったことは確かであり、その双方があいまって、独特の旅文化が形成されていったと言えるだろう。

一方、旅人が訪れる名所旧跡側も、この動きに積極的に参画していた。京都の寺社では、近世初期から遠忌・開帳を盛んに催して客の誘致につとめており、<sup>(6)</sup> 恐山菩提寺でも同様の理由で「賽の河原」や「血の池」という見所を新たに作っている<sup>(7)</sup>。また、京都の東寺では、賽銭の分配に関する紛争が、富士山の麓では、参道や「定宿」に無き導者<sup>(8)</sup>の奪い合いが起きているなど、<sup>(9)</sup> 旅人の来訪による経済効果は、無視できない水準にまで達していた。

以上のような時代背景の中で、本稿で取り上げるモデルコースを取めた案内記が登場した<sup>(10)</sup>。それは、定められた基点から出発して、道なりの名所を順覧し、基点に戻るといったコースが複数収録されたもので、「第一日」「第二日」のように日割になっている場合と、「東北の方」「西南の方」などと地区・方角別に組まれる場合があった。コースを軸に、立項された名所旧跡への行き方と距離、その名

所に關する簡単な説明が付される。大きさも分量も、コンパクトにまとめられた小型案内記が一般的で、「これをたづさへて、其所にゆき、其名を尋ね見」<sup>11)</sup>られるように作られた実用書であつた。

それまでの案内記は、名所旧跡の歴史・沿革・宝物などの情報に重点を置いていたが、モデルコース収録の本は、その名所の位置やそこへの行き方、つまりアクセスに力を入れたものになる。増え行く旅人の中には、費用などの問題から、案内人を雇わずに名所をめぐりたい人もいたであろうし、逆に、名所には参道が整備され、幕藩体制下の治安の向上で旅の安全が保障されるなど、そのための環境も整えられつつあつた。名所へのアクセスは、広い需要のある情報となつていたのである。ただ、当時は徒歩旅行が基本であつたため、いちいち名所ごとにアクセスを示すのは容易ではない。そこで、コースを設定して、道なりの名所から次の名所へ、その行き方と距離を記す方法が流行し、一般的になつた。

「京」「大和」など、ある範囲の地域に限定し、その名所ごとの解説とアクセス、そして、主要名所をめぐるモデルコースを掲載するという形態は、今で言う観光ガイドブックとほとんど同じである。

特にモデルコースを提示する点は、現在のワンデープランや周遊モデルコースに直結するものであり、わかりやすい観光案内の原型と言えよう。後述するが、なかには目録や凡例からその趣向を前面に打ち出しているものもあつて、観光文化の確かな普及を示してくれ

ている。

以上のように、モデルコース案内記は、注目されるべきジャンルであるにもかかわらず、これまでの研究では、名所記や道中記を体系づけていく中で、多様化の一環として捉えられるにとどまつており、書名すら言及されないのが現状である。<sup>12)</sup>それは、小型であるが故に、内容が簡潔すぎ、文学性に欠け、あるいは地理学的史料にも適さないという点に起因しよう。運よく叢書や集成に組み込まれたものに関しては、その「解説」が一番詳しい参考文献になつてしまつている場合が多い。重版や改刻、改題本が横行しているためか、書誌学的整理も進んでいない。

モデルコース仕立てになつていくという趣向についても、山近博義氏の研究に取り上げられているのがほぼ唯一の言及である。<sup>13)</sup>特に「「京都もの」小型案内記にみられる実用性」と題された論稿は、扱う案内記が本稿と重なる部分があり、筆者も多くの示唆を受けた。<sup>14)</sup>

一部「京都もの」における実用的記述や名所の配列方法を分析した上で、概ね時代が下るにつれて、より実用的に整理されていくことが検証されている。

ただ、氏の論稿は、おおまかな流れを示されたものであり、案内記間の影響関係については言及がない。同じ京都を対象地域とし、モデルコースの設定という同じ趣向を採つている案内記間において、後続のものが先行のものを参照していないはずはなく、それについ

での考察が必要である。また、実用性を検証するにあたって、本文の実用的記述の用例や構成だけでは不十分であり、読者による実際の使用例が求められよう。

本稿は、以上のような問題意識に基づき、モデルコースを収める案内記がどのように成立し、発展・継承されていったのか、貝原益軒著『京城勝覧』を中心に、明らかにする試みである。そのための手順として、まず、このジャンルの嚆矢となる作品が『京城勝覧』であることを示し、次いで、後続案内記も含めて概要を示したい。その上で、益軒の日記や蔵書目録等を参考にして『京城勝覧』の成立過程を分析し、『京城勝覧』をはじめとする先行案内記が後続の本に利用されていく模様を、両者の本文を比較対照することによって具体的に検証していこうと思う。そして、最後には、『京城勝覧』が実際にどのように使用されたのか、浅加久敬の紀行文『都の手ふり』から用例を挙げて検討し、モデルコース案内記の意義について考えてみたい。

### 一、日割・地区別モデルコース案内記の出現

太宰春台が「地理を知るは、天下を治る本也<sup>15)</sup>」と地誌・地図の政治的必要性を強調するように、各藩における所領把握のための地誌編纂活動は、寛文年間(二六六一〜一六七三)から盛んに行われ始めた<sup>16)</sup>。その流れを受けて、延宝年間(二六七三〜一六八一)頃から、

知識人による民撰地誌も続々と刊行される。林宗甫著『大和名所記』(二十卷十五冊、延宝九年刊)や黒川道祐著『雍州府志』(十卷十冊、貞享元年(二六八四)刊)などがその代表とも言えるが、矢守一彦氏の指摘するように、このような「大部の総合的地誌書が編まれる」一方で、「多様化する需要に即応して機能分化をみせ」、「要約簡便化」された小型案内記が生まれた<sup>17)</sup>。旅文化の盛況とあいまって、右のような総合的地誌編纂の風潮が、地誌の形態における多様化の基盤を為したことにまず注目したい。基盤ができてこそ、応用が可能であり、モデルコースを収めた案内記も、こうした基盤を背景に成立したと考えられる。

さて、(表1)は、管見の限りで、モデルコースが収録されている案内記を初刊年の早い順に並べたものである。前述したように、モデルコース案内記には、一日で巡るコースを数日分収載するものと、地区・方角別に複数のコースが組まれているものがあり、両者とも各コースは、定められた基点から出発し、そこに戻るように編集されている。コースは、動線が短くなるように組まれており、一日コースは当然地区別コースにもなり得る。しかし、その反対は必ずしもそうとは限らないので、本稿では便宜上、前者を「日割コース」、後者を「地区別コース」と呼ぶこととする。尚、③『名所車』と⑦『大和廻り道の枝折』は、他の本とちがってただ右回りに順路を載せるが、基点と区切りがない点を除けば、同じ上方のモデ

ルコースを載せることに変わりはないので、他の本との影響関係を考察するために対象に含めている。<sup>(18)</sup>

(一) 『京城勝覧』初刊年をめぐる

① 『京城勝覧』は、現存する最古の刊本が享保六年（二七二一）版であるため、『名所車』の後に位置づけられることが多い。<sup>(19)</sup>しかし、本稿では、表1からもわかるように、初刊年を序の年記から採っている。もちろん、単にそれが②『京内まいり』よりも早いという理由で『京城勝覧』を最初に置いた訳ではない。モデルコース案内記の推移及び影響関係を確認するには、まず、この順序にした理由を示す必要がある。煩雑になるが、概要に入る前に、ここで『京城勝覧』の初刊年に関する考察を加えたいと思う。

『京城勝覧』は、福岡藩儒、貝原益軒（二六三〇～一七一四）の著である。『大和俗訓』などの訓ものや『大和本草』の著者として有名だが、紀行文も数多く残しており、『和州巡覧記』『木曾路之記』などが刊行された。藩命を受けて『筑前国続風土記』（三十巻、元禄十六年（一七〇三）成立）を編纂するなど、地理にも造詣が深かったと言える。

現存する『京城勝覧』最古の刊本が享保六年版であることは前に述べた通りであるが、表1の備考において享保三年版に「」を付したのは、天明四年（二七八四）の改刻本の刊記に「享保三戊戌年

春元版」とあるのに拠っていて、現物の所在を確認できていないからである。<sup>(20)</sup>しかし、版元である柳枝軒小川多左衛門（本姓茨城）の享保二年の蔵版目録には、『京城勝覧』が既に載せられており、享保二年以前に刊行されていたことは間違いない。つまり、享保三年版が初刊本でないことは確かなのである。

次に手がかりとなるのは、版元の柳枝軒宛、益軒書簡の「京廻り之書三冊、調下し候<sup>(22)</sup>」という一文である。「京廻り」は、『京城勝覧』を指すもので、この頃には既に刊行されていたことになる。日付は十月二十五日、年度の記述はないが、同書簡に「俗訓板下清書一遍見申度候。若相違有之候而、御改刻候は、可為御造作候」と、『大和俗訓』の出版前であることをあらわす記述がある。『大和俗訓』は、宝永六年（一七〇九）六月の刊本があるので、この書簡は宝永五年かそれ以前のものということになる。したがって、『京城勝覧』の初刊年を「宝永三年立春日」（自序）以降、宝永五年十月二十五日以前に狭めることができる。

もっとも、宝永五年十月は、②『京内まいり』の刊行より九ヶ月下つてしまうので、『京城勝覧』が『京内まいり』よりも先に刊行されたという決定的証拠にはなり得ない。ただし、益軒が『京内まいり』を読んで、『京城勝覧』に利用することができなかった傍証には成り得ると思う。それは、次のような理由からである。

後に三章で詳しい分析を行っているが、結論を先に言うと、『京

『京城勝覧』と『京内まいり』間には、引用に近いほどの本文の利用が認められ、どちらかがもう一方を直接参照していたことは明らかである。しかし、問題の宝永五年、益軒は福岡で隠居生活を送っていた。彼は、自著の『大和俗訓』でさえ、刊行の三ヶ月後に受け取っており、京都からの書籍が福岡に届くには、数ヶ月を要したと推される。<sup>24</sup>つまり、刊行後に京都から送られてきた『京内まいり』を益軒が福岡で受け取り、参照して自著に反映し、その上で、原稿を再び福岡から京都の書肆に送り返し、それが校訂、彫刻、印刷を経て出版に至る、という一連の作業が行われるには、九ヶ月という期間は短すぎ、益軒が『京内まいり』を参照していた可能性は非常に低いのである。

これに対して、『京内まいり』は、ほぼ洛中のみで日割コースを編成し、漏れた洛外の名所を「寺院部」<sup>25</sup>「神社部」として付すが、この付録には、急造の結果と見受けられる不備がある。寺院部の最初の五寺、神社部の最初の社は、沿革を記したあとに詳細な参拜コースまで提示されているのに比べ、残りの八十一寺、二十六社については、索引のようなごく簡略な記述にとどまっているのである。記述態度が一貫しておらず、この完成度の低さは、『京内まいり』が『京城勝覧』の趣向を借りて短期間にまとめられた傍証になり得ると考える。

また、これについても二章で詳述するが、『京城勝覧』の成立に

関わった文献は、貞享四年（一六八七）の段階でまとめて参照されており、『京城勝覧』の草稿も、既にその頃編集されていた可能性が高い。事実、本文は序文よりも早い段階で出来ていたと考えるのが自然なので、益軒が出版を目前にして、自序の「宝永三年立春日」以降に刊行された『京内まいり』のような文献を、さらに利用したとは考えにくい。尚、『新修京都叢書』の解説も、この自序の年記をもとに、「最初の板行は宝永まで遡るのではないか」としている。<sup>26</sup>

以上のような諸理由から、『京城勝覧』が『京内まいり』よりも前に刊行されていたとみるのが妥当であろう。本稿では、『京城勝覧』が当ジャンルの嚆矢である可能性が高いと判断し、それを前提に論をすすめる。

## (二) モデルコース案内記の概要と推移

それでは、①『京城勝覧』の概要から示していきたい。本を開くと、まず各日割コースのおおまかな順路と総里数が明示された「目録」があり、読者が見てその日の目的地を決められるようになっていく。ただ、以後、目録を設けているのは、表1において⑧『京案内道しるべ』のみである。モデルコース案内記や道中記類は、携帯に便利なように小冊となっているので、目録の必要性を感じなかったのか、紙数を削りたかったのか、いずれにせよ目録がない場合が

表1 日割・地区別モデルコース案内記の概要

	書名	初刊年(年・月)	巻冊	丁数(丁)	書型(㎝)	趣向	基点	挿絵	編著者	所見本	備考
①	京城勝覧	宝永三・一 (二七〇六)序	上下二冊	上五十一 下五十二	一八 ×一二	十七日	(三条辺り)	○	貝原益軒	東大、〈京〉茨城多左衛門版(享保六後印)	(享保三年版)、享保六年後印本あり。天明四年改刻本『天明再板/京都めぐり』、(寛政五年版)、文化十二年後印本あり。
②	京内まいり	宝永五・一	一冊	四十二	一二・五 ×一九	三日	三条大橋	○		東大、〈京〉辻勘重郎版	(宝暦五年版)、天明三年後印本あり。
③	名所車	正徳四・五 (二七一四)	一冊	一一三	一五・五 ×一一	右回 (上加茂↓大原社)		○		新修京都叢書5、〈京〉藤屋伝兵衛・同武兵衛版(享保十五・一再版)	享保十五年再版本「増補絵入名所車」、文政十三年改刻本「増補都名所車」(池田東籬補)あり。
④	七ざい所巡道しるべ	宝暦十一・七 (二七六一)	三巻三冊	①三十五 ②四十五 ③三十	一一・二 × 一六・二	八日	六角堂前	×	行田耄翁	道中記集成19、〈江戸〉前川六左衛門・奥村喜兵衛版(享和二・四後印)	(宝暦十四年版あり)。享和二年の求版本は、巻頭に序・凡例・東海道及び木曾路の略行程表が付される。③が京都の日割コース。
⑤	大和名所記	明和六・一 (二七六九)	一冊	三十六	一八 ×一二	五十一地区	南都	×		東大、〈奈良〉井筒屋庄八版	巻頭書名は「大和国奈良並国中寺社名所旧跡記」。一地区は伊勢に関するもの。
⑥	都名所道案内	安永九・九 (二七八〇)	一冊	二十四	八×一九	七地区	三条大橋	×	君修	東大、出版者不明(破れ)	
⑦	大和廻り道の枝折	天明三・二 (二七八三)	一冊	四十六	一一× 一六・一	右回 (帯解村↓こけ茶屋)		○	田居叟	道中記集成17、底本の出版者は備考参照	〈奈良〉千葉清蔵、〈京〉小川多左衛門、〈大坂〉高橋平助・柳原喜兵衛版。
⑧	京案内道しるべ	文政十一・三 (二八二九)	一冊	四十七	一五・五 ×一一	六日	三条大橋	○	池田東籬	東大、〈京〉めとぎや宗八版(天保四冬後印)	天保四年後印本あり。
⑨	京都順覧記	天保一・七 (二八三二)	三巻三冊	①二十九 ②六十三 ③八十四	一二・五 ×一八	六日	三条大橋	○	池田東籬	東大、〈京〉竹原好兵衛版	①は大名屋敷等の一覧、②は日割コース、③は町鑑。(元治、慶応元年版あり)。天保改正花洛名所記(刊不明)は②と同版。
⑩	袖中都名所記	天保十・六	一冊	八十九	七・五× 一六・五	六日	三条大橋	○	池田東籬	早大、〈京〉竹原好兵衛・平野屋茂兵衛版	『京都順覧記』②と同順路。内容と挿絵が増補される。

(注) ①から⑩まで、初刊年の早い順に並べた。書名は『国書総目録』(岩波書店)の統一書名による。「趣向」は日割コースか、地区別コースかを示したもので、その日数と分割地区数を書いた。「右回」は、特にコースを区切らず、右回りに順路をすすめていることをいう。「所見本」が初刊本でない場合は、( )に記した。「東大」は東京大学総合図書館蔵本、「早大」は早稲田大学古典籍総合データベース掲載本、「新修京都叢書」は、野間光辰(編)『新修京都叢書』全25巻(臨川書店、一九六七年、再版、一九七六年)、「道中記集成」は、今井金吾(監修)『道中記集成』全44巻別3巻(大空社、一九九六〜一九九八年)である。後印や改刻がある場合は備考に示し、筆者未確認の本で『国書総目録』などにあるものには(一)を付した。

多い。

次に、『京城勝覧』には、「序」と「南北たてすぢの町の名」の羅列がある。序文は「神武天皇、大和州橿原の都を初て立玉ひしよりこのかた〔…〕と、遷都の歴史をうたいながら名所旧跡の多い京都を称える。京都や奈良の案内記では、このような書き出しは珍しくなく、表1でも③④⑤⑥⑦⑩に見られる。これは、『雍州府志』や『大和名所記』など、総合的地誌を真似た結果だと考えられる。また、町名を羅列する点も、②③⑥⑧⑨に共通しており、その後の京都を対象としたモデルコース案内記の典型となる。

そして、町名の羅列の後、『京城勝覧』では、洛中の名所が方角別にまとめられており、メインの日割コースは主に洛外の名所で編成されている。京都ではないが、⑦『大和廻り道の枝折』も、今で言う奈良公園周辺の名所をコースに組み込むことなく、巻頭に分けて解説する。基点となる洛中や南都近辺の名所は、遠出をしない日やコースの行き帰りなどに、いつでも自由に訪ねられるように配慮されたものであろう。後続の京都モデルコースの推移は、②『京内まいり』がほぼ洛中のみコースと洛外を付録とする『京城勝覧』と逆の構成であることを除けば、洛中洛外両方を含むコース編成へと収斂される。

コースの距離は、四里から九里とまちまちだが、後期の⑧⑨⑩には十里以上のコースも増えてくるので、『京城勝覧』のものは、比

較的ゆつたりしたコースと言える。遠方に行く時は見物する箇所を少なくし、近場の時は多くを盛り込む等の配慮がなされている。出発地点は記されていないが、当時宿泊施設が集まっていた三条辺りを基準としているようである。<sup>27)</sup>以後もここを基点とする案内記がほとんどで、表1②⑥⑧⑨⑩では、三条辺りと類推せずとも「三条大橋」と明記されるようになっていく。

『京城勝覧』に続く②『京内まいり』には、序はないが「凡例」があり、これも以後、③⑥⑦⑨⑩と、諸書で見られるようになる。凡例は箇条書きのため、目に入りやすくわかりやすいのが利点であろう。「専順道をもととして」「案内の人の手引なくして見る」ことができるように構成したこと、「道のりは三条の大橋よりの行程」であることなどが、明確に打ち出されている。もともと、コース内容についての言及はなく、日割コースであることも、本文の途中に「次の日順道」「次の日」とあるのを見てはじめてわかるといふ憾みはある。⑧⑨⑩も、一日、二日と数字を振らず、「次の日」の表記を採択しているが、「凡例」で日割コース仕立てであることがわかるように改善されている。④『七ざい所巡道しるべ』は、「叙」によって、「七ざい所巡」が西国三十三所巡りなどのような信仰のための順路であったことがわかる。内容からすると、「七ざい所」とは、伊勢、大和、高野山、大坂、宇治・伏見、京、比叡山を指すらしい。第三巻が洛中見物、八日間の日割コースとなるが、注目すべ

きは、六角堂前が基点となっていることである。六角堂頂法寺は、西国巡礼三十三所の第十八番札所であり、本書の信仰的特性に適合している。洛中の中心に位置しているので、コースの基点としても適当ではある。

さらに目につくのは、日割コースをはじめる前に「廻次第は是に記たる、少も違なけれども、案内者をつれざれば道しれず。時うつり心をいたためあしきこそあり。案内者は必つれべし」と、案内人の同伴を強く勧める点である。他の本では、何も記さないか、あるいは該本が案内人の代わりになるとしており、このような記述は珍しい。『七ざい所巡道しるべ』は、コースの内容についても、他の本との影響関係が希薄であるが、それは、本書が表1における唯一の江戸版であることも関係していると考えられる。

⑤『大和名所記』<sup>29</sup>の最初のコースに見出しはないが、南都界限をめぐるものらしい。現在も奈良観光の中心となっているこの地域を最初に据え、一丁裏〜二十一丁表と、半分以上の分量をあてている。残りのコースは、「南都東山より南の山まで」「南都より西山北より南まで」「南都よりみなみ平地」「南都より西北南まで平地」の四コース、計五コースの案内記となる。コース名にわざわざ「平地」を付しているが、同じく大和の案内記である⑦『大和廻り道の枝折』の凡例にも、「山坂悉く記す。書付なきは平地と知るべし」とある。大和は標高の高い山に囲まれている上、吉野や竜田などの主要名勝

地が山間にあるため、土地の起伏の表記は、歩いて旅する人にとって有用な情報であり、実際の旅に沿った内容となっていたことがわかる。

そして、本書の巻末には、大和めぐりの前後に訪れることが多かったからであろう、近郊の名勝地である高野山、和歌浦、伊勢の名所について簡略な説明が付されている。特に伊勢は「伊勢宮めぐりの次第」と、一応コースにもなっており、最終丁の「伊勢より下向ならへのみち」も、伊勢参宮を経て奈良に入る参詣者が多かった当時に反映している。<sup>30</sup>

⑥『都名所道案内』のコースは、「洛中之分」「東山之名所」「西山之名所」「東北之方」「東南之方」「西南之方」「東南之方」の七コースである。名所の項目名を大きく、説明を小さく記すことよってめりはりをつけ、項目名の右には三条大橋からの距離が小さく示してある。⑨『京都順覧記』は、この形式をそのまま採っており、順路や本文も似通っているため、本書を利用して編纂されたと考えられる。

このほか、本書が三つの標示記号を使い分けている点にも注目すべきだろう。地区別コースに入る前に「▲此印三条大橋より道のり」●此印順々への道のり △此印開基より安永九年までの年数」と予め取り決めを行っている。②『京内まいり』も「△」を「道筋をことほる」記号として「凡例」から打ち出していたが、本書の場合

は、数種を使い分けた初期の例となる。<sup>31)</sup>

⑦『大和廻り道の枝折』も、標示記号を使い分けている案内記である。巻頭の「凡例」によると、「□」が駅宿の印、「○」は道筋にある寺社の印、「●」は道筋にないもの名高い寺社の印、「▲」は道筋村里の印、「△」は道筋をことわる印、計五つ、と⑥『都名所道案内』よりも多い数を使用する。また、道筋には野線を引いておらずなど、②『京内まいり』でも使用済みの手法が応用されており、時代が下るにつれて、視覚的效果も改善されていったことがわかる。先述したように、本書はコースに区切らず、右回りに順路を記すが、区切りがなくとも、読者は先の印を参考にして、容易に泊まる場所を選取できたと考えられる。

以下の⑧⑨⑩は、みな池田東籬（二七八八〜一八五七）の案内記である。彼は、③『名所車』が改刻される時に、増補を行った人物でもあり、この他にも多くの地図・地誌製作に携わった。読本作者としても知られている。

⑧『京案内道しるべ』は、初期の三作（①②④）の後印本が流通し続ける中で、百年ぶりに登場した日割コースである。その序に「日かず纒にして見所多くしるべせんよしも哉」とあるように、わずか六日間に洛中洛外両方の名所を含むよう、工夫されている。十七日の『京城勝覧』と比べても、石清水八幡宮と山崎の二コースがないだけであり、なかには十四里というゆとりのないコースもある

が、費用の関係で長期滞在できない地方からの旅人にとっては、ありがたい案内書だったに違いない。<sup>32)</sup>

それから、表1において目録があるのは、『京城勝覧』と本書のみである。前に述べたが、本書の目録は特に充実している。はじめに「東の方 第一日め」と見出しがあつて、「三条大橋 矢田寺」：「とその日に廻る細かい名所旧跡が三段の段割りで羅列され、それぞれの名所には、さらに割書で右行には「間々の里数」が、左行には三条「大橋より里数」がひとつひとつ施されているのである。『京城勝覧』の目録が文章になっているのに比べ、これは、辞書の索引のようになっていたので、特定の名所を探すのに便利であり、特にコースを辿らずともそこを訪ねられるという利点もある。

同じ東籬の著⑨『京都順覧記』は、二冊目が日割コースであり、前作と同じ六日間のコースである。ところが、それとは関連が薄く、前述したように形式や順路を⑥『都名所道案内』に倣い、解説等に増補を加えている。日割コースの距離は、十五里、十九里などがあり、前にも増して困難なコースになっているが、前作では省略していた石清水八幡宮と山崎をもコースに入れたためだと考えられる。

本書には、前作のように充実した目録はないが、その代わり、縁起や歴史など、名所の沿革がより詳しく記述されている。一方、次作の⑩『袖中都名所記』は、本書と同じ順路の六日間の日割コースであるが、従来巻頭にあつた地図のような名所図をなくし、代わり

に本文途中に『都名所図会』のような挿絵をはさむなど、読み物としての面白みを足している。同じように要約簡便化されるなかにも、案内記によってそれぞれ重点を置く部分を異にし、他書との差別化をはかっていったことがわかる。

以上、モデルコース案内記の概要を確認してきたが、これをもとに特に京都を対象とする案内記について総合的に整理してみると、当初の十七日、三日から八日、七地区、六日と、一週間前後に落ち着いていくことがわかる。この七日前後という日程が意味するものは何だろうか。日割コースを八日にまとめた④『七ざい所巡道しるべ』(三六八〜三六九頁)において、次のようなくだりがある。

京へ着て、少もたゆみなく巡所をめぐるべし。さはり出来て見残て帰たる人多くあり。巡所を不残めぐりて、其後にあるひは芝居などを見、あるひは休息すべし。

毎日の巡所は、京都に長滞留する人は少、滞留の日数少き人はおほき故、滞留の日数少に相応をはからひてしるせり。

「少もたゆみなく」「めぐるべし」と指示されているように、コースはゆったりしたものでなかった。京都に滞留する日数によって調節すればよいので、コースは「滞留の日数少き人」に合わせるという。つまり、短期滞在と長期滞在の両方に通用するよう、で

きる限り圧縮したコースを提示しているということになる。

⑧〜⑩の著者東籬は、六日間のコースに、洛中洛外を含む京都のほぼ全域をまとめていたが、これも同じようにあらゆる旅に通用するよう、普遍化をねらった結果だろう。彼は、⑨『京都順覧記』の改題本『天保改正花洛名所記』の凡例において、「日数わづか六日をかぎり」と。洛中を一日とし、五日を以て都の四方を廻らしめんとす」と、「わづか六日」であることを強調している。これは、洛中洛外のコースを六つ以下にまとめるのが難しいことの裏返しでもあり、時代が下るにつれて、「要約簡便化」が、限界まで試みられていたことが知れる。もつとも、ただ単純にコンパクト化していた訳ではない。山近氏の論稿で検証されているように、東籬の案内記のコースは洛中近郊のものから記載され、最初の方のコースだけを巡っても最大の効果が得られるよう、工夫も凝らされていた。

しかるに、このような発展が成し遂げられたのも、初期の①『京城勝覧』や②『京内まいり』から構想を得て、改善を施したからである。とりわけ、①『京城勝覧』は、モデルコース仕立てに着想した最初の案内記としての意義があり、後年の継承・発展を踏まえる点、その画期性は評価されてよいだろう。この点に注目して二章では、『京城勝覧』がどのように成立したのか、その過程を具体的に検証してゆきたいと思う。

## 二、『京城勝覧』の成立過程

『京城勝覧』の著者、益軒は京都出身ではない。ただ、若い時に藩の計らいにより六年間の京都遊学を果たし、以後も、一年前後の長期滞在を五回ほど経験、短期滞在も合わせると、その訪問回数を生涯二十四度にのぼった<sup>34)</sup>。彼の日記には、『京城勝覧』に書いた内容が蓄積されていくさまを物語るかのように、各地に出かけた記録が残されている。季節ごとの花見や月見、寺社の祭に参加し、ときには近郊の伏見や吉野、宇治等に足をのぼした。また、元禄元年（一六八八）や同二年には松ヶ崎や北野、貴船等に薬草調査に出向いている。益軒は、おそらく多くの京都人よりも京都を知り尽くしていたであろう。特に妻の東軒を伴って上京した際には、京都の名所をまとめて訪ねており、『京城勝覧』執筆の参考になったと推測される。例えば、元禄四年四月の日記には、次のように記している。

四日 家婦と東山を同遊す。花、猶残る。今日遊観の処は、大仏・三十三間堂・泉涌寺・今熊野・建仁寺・六波羅・清水・霊山長楽寺・丸山祇園・高台寺・知恩院・庚申堂なり。  
五日 妙心寺・仁和寺・等持院・竜安寺・金閣寺・鷹峰大徳寺・今宮・北野に往く。  
八日 誓願寺・六角堂に往く。

十二日 百万遍・黒谷・銀閣寺・万無寺・吉田・鹿谷・光雲寺・永観堂・南禅寺・青蓮院に往く。

十五日 頂妙寺に往き、藤の花を見る。南禅寺に往き、乗払を見る。又、安井門跡の藤の花を見る。

十七日 坂本に往き、無勒寺に登る。山王祭を見る。辛崎・松下に往き、二更にして帰る。

十九日 東西本願寺に往き、西本願寺の美屋を見る。又、本国寺に往く。

二十五日 金閣寺・北野・高尾・牧尾・梅尾・嵯峨・松尾に往く。

このような妻との見物日程は、『京城勝覧』のものとは必ずしも一致しないが、上述したように、『京城勝覧』の日割コースを組むひとつの目安となったに違いない。また、日記には「家婦、大原野に往く」「家婦、嵯峨に往く」などの記述も見え、益軒の公務や友人との用事がある時に、東軒は別行動で遊山を楽しんでいたことがわかる。これらの東軒の見物は、予め説明された益軒の道案内のもとに決行されたと見てよく、益軒の京都に関する知識は、周りの人々の便を助けていた。さらに益軒は、公の場でも京都に関する質問を受けており、「益軒先生年譜<sup>35)</sup>」の元禄二年四月には、藩主綱政が「親しく京師の事を問う」とあり、また、同五年十一月には、前

藩主光之が「先生を召して京師之事を問う」とある。以上のような京都に関する長年の経験と知識が、『京城勝覧』を編むための下敷きとなっていたのである。

それでは、その土台をもとに、『京城勝覧』は具体的にどのような著述・編集されたのだろうか。日割コースを組む作業ならともかく、名所の解説まで経験だけに頼るのは難しい。『京城勝覧』の序にもあるように、山城については「外にも詳にする書あまたあれば、かうがへ見」ることができたため、益軒自身も先行の地誌を参照していたとみるのが自然である。それが身近にある文献ならば、さらに利便性が増すだろう。益軒の「家蔵書目録」<sup>36</sup>には、『雍州府志』と『京羽二重』の二書が見える。

『雍州府志』は、一章で少し述べたように、黒川道祐（？）一六九二の著で、自序によると、彼は洛中洛外をたびたび歩いて地理を考察、古記録や金石文を書きとめるなどの精密な調査に基づき、中国の地誌である『大明一統志』に模して書いたという。内容は雍州、即ち山城一国の地理・沿革・寺社・土産・古跡・陸墓を詳記した漢文体地誌である。彼はこの他、京都の年中行事を詳述した『日次紀事』をはじめ、『芸備国郡志』『有馬地誌』なども著している。事実、道祐は益軒と交遊のあった人物で、上京した際の日記にしばしば登場する<sup>37</sup>。道祐が友人ということもあって、彼の著書が実際の体験と長年の考証によるものであったことを知っていたのだろう、

『雍州府志』は『京城勝覧』のいたるところに利用されている。左に一例を示そう。<sup>38</sup>

本涌寺 松か崎に在り。日蓮宗にして立本寺に属す。能化の僧之に住す。所化の僧多し。日蓮宗に於て是を談所と謂ひ、又学室と称す也。

妙泉寺 同処に在り。日蓮宗妙伝寺の末寺也。凡そ此の村の人悉く日蓮宗なり。毎年七月十六日の夜、男女此の庭に聚り、各々法華経題目を唱ふ。踊躍を作す、是を題目躍りと謂ふ。山上炬を以て妙法の二字を点す。〔雍州府志〕二七六頁

松か崎 みそろ池の東、ひえの山の西にあり。是より狐坂を越て岩倉に行道あり。○本涌寺 日蓮宗の談所なり。妙泉寺 同宗なり。此里の人は日蓮宗なり。毎年七月十六日の夜、男女此寺の庭にあつまりて、法華の題目をとなへておどる。山上には此夜、松明を以妙法の二字を大にともす。京よりよく見ゆ。

〔京城勝覧〕下、四十九丁表裏

益軒の作業を順に見ていくと、まず、見出しを寺名の代わりに地名の「松か崎」にし、近郊の名所との連絡を書く。そして、『雍州府志』の「本涌寺」の項目から「日蓮宗」と「談所」という言葉を

抜き出し、「日蓮宗」の反復を避けて「妙泉寺 同宗なり」とする。その後の「妙泉寺」の説明はほぼ『雍州府志』のものを採り、益軒は最後に「京よりよく見ゆ」の一文を付している。この他にも、万無寺や清閑寺、岩屋山など、同じような例は多数見られ、部分的な利用も合わせると、『京城勝覧』の三百三十五項目中、八十項目、つまり約四分の一の項目で『雍州府志』を何らかの形で用いたことがわかる。

一方、水雲堂孤松子著『京羽二重』<sup>39</sup>（六巻六冊、貞享二年（一六八五）刊）は、『雍州府志』に次いで多く取材されている本である。益軒の「家蔵私書備録」<sup>40</sup>によると、『雍州府志』と同時期に『京羽二重』を購入していたので、一緒に参照したのも頷ける。『京羽二重』は、町鑑のような構成になっており、内容が一覧の簡条書き形式で書かれているので、索引から引くように情報を得ることができ。そこで益軒は、『雍州府志』には載せられていない細かい尺や里数に関して、本書を主に用いたようである。例えば、『京城勝覧』「大仏」の項目で、高さにはじまり「口のひろさ」など様々な寸法を記すが、これは『雍州府志』にはないのに対し、『京羽二重』には「大仏殿寸尺」があつて具体的な長さが記載されている。

このような補助的役割の外、さらに次のような例もある。『京城勝覧』序、冒頭の「平安城は山城州愛宕郡宇多の邑にあり。神武天皇、大和州橿原の都を初て立玉ひしよりこのかた、大和河内摂津山

城近江長門などに宮所を定め玉ふ事三十五度、遷都は四十余度に及べり」に関して、『京羽二重』も、同じく巻一の最初の項目で「遷都」を扱い、「神武天皇」から順に記す。『雍州府志』巻一にも遷都関連事項が載せられているが、冒頭ではなく文章の途中にあり、山城への遷都に限定されていて「神武天皇」は登場しない。

以上のように、益軒は、自分の経験をもとにしつつ、『京城勝覧』の開始部分や項目ごとの解説文において、家蔵書を参考にして執筆の助けにしていた。このように大部の詳細な地誌を編述に利用している点は、当時の「総合的地誌」の「要約簡便化」の流れとも符合している。しかし、別の言葉で言えば、先行の地誌を要約するのは、いわば当然の作業であり、目新しいことはない。つまりは、先述したように、『京城勝覧』の意義は、モデルコースの設定という初の試みにあるのである。果たしてその発想の源はどこにあつたのだろうか。

前述した妻との京巡りの経験も、下敷きになったであろうが、実は、日割コースの趣向の手がかりになったと考えられる書が、益軒の読書目録である「玩古目録」<sup>41</sup>に見える。「玩古目録」貞享四年（二六八七）六月の項目、『雍州府志』の一つ前に並んで記されている『鎌倉志』（八巻十二冊、貞享二年刊）である。『鎌倉志』は、別書名「新編鎌倉志」として知られている本で、水戸光圀の延宝元年（二六七三）の見聞記をもとに、彰考館の河井恒久らが編纂した総

合的地誌である。四百四十三の名所旧跡を百十九の文献史料をもとに考証しており、以後数多くの紀行文や案内記に引用され、鎌倉の地理書に影響を与えた。<sup>42)</sup>

その「新編鎌倉志凡例」に「巻毎に一日の行程を量り、録して一冊と為し、以て歴覧に便りす<sup>43)</sup>」とある。つまり、『鎌倉志』の場合、一卷が一日コースになっているので、首巻を除くと計八日の行程になる。ただ、このことに関する言及は、他の箇所には見あたらず、凡例を読まなければ、そのように構成されていることに気付かないまま終わるだろう。管見の限りでは、先行研究でもこの趣向に関して触れたものがなく、<sup>44)</sup>本書の重点が日割コースに置かれていないことは明らかである。

それに比べ、『京城勝覧』は、巻頭から十七日の日割コースとその日の歩行距離を整然と目録に並べて示してある。日割コースであることを前面に打ち出しており、本書の売り込むべき長所として捉えていることがわかる。つまり、寺社の解説などの内容でなく、モデルコース仕立てになっていることが、最大の特長なのである。これに加えて、『鎌倉志』の大本十二冊という体裁は、携帯用というより机上用である。当時の旅において一番身近な参照源は、必然的にモデルコースになっている知人の紀行文や覚書であり、それを片手に旅するのが一般的であった。<sup>45)</sup>それを普遍化して、小型案内記として公刊した点に、『京城勝覧』の意義があるのである。

### 三、『京城勝覧』の後続案内記への影響

#### (一) 日割コースの趣向を借りた『京内まいり』

洛外十七日コースの①『京城勝覧』と、洛中三日コースの②『京内まいり』は、その対照的な構成にもかかわらず、初刊年が近いこともあって、直接的な影響関係が認められると、一章で述べた。ここでは、本文を詳しく対比し、両書の類似性を明らかにしたい。

まずは、両書に共通してある町鑑のような通り名の羅列において、各々の通り名に施された説明がほぼ同じである。特に、最後の通りである「朱雀」のすぐ後に付された説明は、

朱雀 今は千本通といふ。是より西は人家なし。又所によりて

大宮よりしに人家なき所あり。 (『京城勝覧』上、三丁裏)

朱雀 今は千本通といふ。是より西は人家なし。又所によりて、大宮より西に人家なき所も有。 (『京内まいり』二丁表)

と、『京内まいり』の改行と、最後の方に「も」を入れていることを除けば、全くの同文である。また、その後『京内まいり』のいよいよ日割コースに入る直前に、これまで羅列してきた通りの名前を実践で使いこなせるよう、用語説明があるが、これも、『京城勝

『覽』で行われていた記述であった。左に両書の該当箇所を引用する。

京都の町、南北を縦とし、東西を横とす。縦町なれば、北にゆくをあがると云。南にゆくをさがると云。横町なれば、何の町を東へ入、西へ入と云。すべて此四言をもって町を尋れば、まぎれなくたづねやすし。  
〔『京城勝覽』上、一・二丁表〕

さて、町所をたづぬるに四つのこと葉あり。南北のたつ町を、北へゆくをあがるといふ。南へゆくをさがるといふ。よこ町なれば、あの通をひがしへいる、にしへいるといひて、たづぬへし。  
〔『京内まいり』四丁裏〕

「く」に（へ）ゆくをくと云（いふ）」という文章、「四言」「四つのこと葉」をもって「たづ」ぬるといふ単語の選択など、酷似している。その後、順路に入ってから、第一所目から流用の跡が見られる。

○内裏 凡人常の時御門に入らず。時により、御免ありて拝観する日あり。

○仙洞御所 ○女院御所 此二御所も拝覧なりがたし。

○親王の御宅并諸官家

以上、御築地の内に有。御築地の内、凡人籃輿にのらず。

〔『京城勝覽』上、四丁裏く五丁表〕

禁中 南北百九拾八間 東西百貳拾五間半 凡常の時御門に入らず。時により、御免しありて拝覧する日あり。〔…〕

○仙洞御所 南北百七拾四間半 東西百五拾四間半

○院御所 南北百拾五間半 東西百貳拾六間半

○親王の御宅并諸官家 御築地の内に有。惣築地南北八丁余、東西六丁余。此内凡人籃輿にのる事をゆるさず。

〔『京内まいり』五丁表〕

『京内まいり』が「内裏」を「禁中」とし、具体的な尺を加えているが、項目の立て方と説明部分はほとんど変わらない。ここまで似ているのを、単純に偶然と片付けることはできないだろう。もちろん、両書が同じ参考文献を利用した可能性もあるが、益軒は、『雍州府志』や『京羽二重』等、先行の地誌を利用するにしてもかなりの改編を加えており、『京内まいり』がそれらを参照してここまでの類似を為すのは不可能に近い。やはり『京城勝覽』を直接参照していたと見るべきである。

ただし、右の「禁中」以後のコース内容においては、類似しているところが見当たらない。前述したように、両書のコース編成は対

照的であったので、用いるには不適當であり、この後は、『京童』や『京羽二重』など、他の文献を参照している。<sup>(46)</sup>しかし、いずれにせよ『京内まいり』が巻頭部分において『京城勝覽』を利用していったことは確かであり、モデルコース仕立ての趣向を真似たことになりはしない。

『京内まいり』の作者は、おそらく『京城勝覽』を見てモデルコース案内記の需要を見込んだのであろう。そして、『京城勝覽』と重複しない洛中を材料に、日割コースの趣向を真似て、案内記を編んだのではないだろうか。両書は、刊行年も近いので、同時代の読者は、自身の京都滞在期間や重きを置く名所によってどちらかを選択し、それぞれの京都を体験することができたであろう。また、時期的にも『京城勝覽』の序文が書かれた宝永三年（一七〇六）は、大々的なお蔭参りが起こった宝永二年の翌年であり、それ以後、京都を訪れる旅人の数も相当増加したはずである。『京城勝覽』も売れ行きを期待した出版であっただろうが、『京内まいり』も同様の目的でそれに続いたと考えられる。

## (二) 右回りへの応用編「名所車」について

このように、①『京城勝覽』の日割コースを借用して生まれた②『京内まいり』であるが、概要に述べたように、「凡例」を設けて該本が案内人の代わりになることや基点を三条大橋とすることを簡条

書きで明記するなど、初期のモデルコース案内記として、後続の案内記に受け継がれた点も多い。ここで取り上げる③『名所車』でも頻繁に利用された跡が認められる。一例を挙げよう。

東本願寺墓所 結構なる事筆に及がたし。むかしはかすかなる事成しが、元禄年中に境内広くなりて再興有。△門を出て左の方西へ、藪の間に細道有。壺丁程行て、又左へ半丁行。双林寺 此門前を直に（筆者注）以下、次の項目へ罫線が引かれている。）  
（『京内まいり』十五丁表裏）

東本願寺御塚 莊嚴結構なる事いふばかりなし。むかしはかすかなる事成しが、元禄年中に境内ひろく成て再興あり。是よりひだりの方の、やぶの間の細道をゆけば、双林寺へゆく。

（『名所車』四九五頁）

「墓所」だったのを「御塚」に変えてはいるが、ほぼ同文である。このような利用が、吉田社や新長谷寺など、約二十五項目で見受けられ、<sup>(47)</sup>すなわち、『京内まいり』が本書の主要参考文献となっているのである。また、『京内まいり』のように多くは利用されていないが、同じくモデルコース案内記の『京城勝覽』に拠ったと思われる部分もしばしば見られる。例えば「下鴨の社 南にあるは、御祖

の社なり。又、河合の社と云。かも川、高野川、此下にて一に落あふ故に河合と名つく」(『京城勝覧』下、三十六丁裏く三十七丁表)、「下鴨の社 当社、御祖の神也。入口に河合の社あり。加茂川と高野川と流れ来りて、此社の前にて両川あふ故に河合といふ」(『名所車』四九〇頁)などがある。ただ、『名所車』は日割・地区別コースになっておらず、右回りに順路をすすめているため、モデルコース仕立てに注目したというよりも、次の項目との連絡に重きを置く点を採用したと言えるだろう。

一方、『名所車』は、この他にも複数の文献を利用しており、その内の一つに、山本泰順著『洛陽名所集』(十二巻十二冊、万治元年〔二六五八〕刊)がある。『洛陽名所集』の場合、名所旧跡と関係の深い偉人の逸話を織り交ぜて載せることが多いが、『名所車』でもその部分を重用したようである。例えば、「東寺」の項目で、「桓武天皇の御建立弘法大師に給はる」としながら、弘法大師の一生を簡単に述べるが、これは、『洛陽名所集』の同じく「東寺」の項目にある弘法大師の逸話を縮めたものである。もちろん、「三十三間堂」の例のように、名所の解説全体が、『洛陽名所集』からの流用であることもある。このほか、巻頭の「洛中洛外之道筋」「洛外之町」「洛中洛外辻子之異名」「洛中所々之異名」は、全て『京羽二重』に拠っており、残りの「三条中島旅籠屋」「三条大橋より諸方道程大概」のみがこの案内記のオリジナルである。

以上、『京城勝覧』に続いて刊行された『京内まいり』が、『名所車』において、主要参考文献として利用された用例を挙げ、『京内まいり』の影響力を確認した。実際、当時の東北・関東地方から伊勢参宮に出かけた記録によると、ほとんどの旅人がその帰りに京都に寄って二〜四日滞在しており、洛中三日コースは、当時の実情を反映したものであった。一章において指摘したいくつかの不備にもかかわらず、影響力を持ち得た理由の一つになる。

『名所車』において注目すべきは、モデルコース仕立ての趣向をそのまま採用せず、右回りの順路に改変した点であろう。この案内記には、項目名の下に割書で所在地、つまり通り名が書かれているので、巻頭の「洛中洛外之道筋」を参照すれば、旅人は自由にコースを中断・再開でき、特定の名所を訪ねられるようになっていた。このように本書は、需要のあったモデルコース仕立ての趣向が、さらに応用されていく模様をあらわす良い例であると言える。

### (三) 『京案内道しるべ』における文章流用

次に分析対象として挙げたい案内記は、⑧『京案内道しるべ』である。本書の目録が索引のような整然とした形態に改善され、日割コースの編成においても、洛中洛外を含めてわずか六日間にまとめるといふ画期的な試みがなされたことは、一章で述べた通りである。ここでは、『京城勝覧』の文章を利用してしている箇所をいくつか抜き

出して示したい。A『京城勝覧』、B『京案内道しるべ』の順に示す。

A 百万遍 吉田の西に有。知恩寺と云。大寺なり。浄土宗四ヶの本寺の一なり。昔は洛中寺町にあり。近年こゝにうつせり。

(上、二十六丁裏〜二十七丁表)

B 百万遍 (割書―寺領三十石) 知恩寺と号す。大寺也。浄土宗四ヶの本寺の一なり。むかしは洛中寺町にありし也。

(五丁表)

A 上賀茂神社 当国の一宮にて、平安城の未立さるさきより有し御社なり。大社也。其地は後に山、前に川ありて、陽にむかひ、陰にそむけり。山のかたちうるはしく、川のなかれいさきよく、御社のたゝすまひ、こと所にかはり、誠に神秀の気あつまれる処、いとすぐれたる霊地也。王城の鎮守となり給ふ事むへなるかな(…) 王城に来れる人は、閑暇ありて遊観をなさば、先此上下の御社に参るへし。(下、三十八丁裏〜三十九丁裏)

B 上賀茂神社 (割書―社領二千七百石) 本社分雷皇太神宮、王城の鎮守にして明神出現の地なり。抑此上社は当国の一宮にて、平安城のさだまらざる以前より有し御社なり。其地後は山、前は川ありて、山の形うるはしく、川のながれいさぎよく、実すぐれたる霊地也。王城にきたる人は、まづ此下上の賀茂に参詣

あるべし。(二十三丁裏〜二十四丁表)

A 白毫院 石にてつける穴室あり。内に入れてめぐりゆく。内のみち、長ひろし。上は富士山のかたちをなせり。寛永年中に院主貧人の飢饉をすくはんために、おほく飢人をやとひてつかせしといへり。(下、二十八丁裏〜二十九丁表)

B 白毫院 石にてつくる穴室有。内に入れてめぐり行。道長く、上は富士山のかたちをなせり。寛永年中に院主貧人の飢饉を救はんために、多くの飢人をやとひてつかせしといふ。

(三十九丁裏〜四十丁表)

以上のように、ほぼ同文とも言える記述が並ぶのである。この他にも、吉田社、銀閣寺など、益軒の文章を用いている箇所は多数見受けられる<sup>(5)</sup>。また、参考までに、益軒の場合は「此日ゆきかへりの道のり。凡六里半。其間のみちすがら見所多し。朝早く出てよし」と、目録の各日程に助言を施していたが、本書も「此所を東へすぐに戻れば四条通也。此日道法凡十里也。朝とく立出べし」(十七裏)と、各日割コースの終わりに書いている。このような指示は、他の先行案内記には見られない特徴で、同様に『京城勝覧』に拠ったものと考えられる。

以上のように、『京案内道しるべ』における『京城勝覧』の直接的影響を確認することができるが、留意すべきは、両者の刊年に百

年以上の隔たりがある点である。しかも、『京城勝覧』序の宝永三年（一七〇六）から、『京案内道しるべ』の文政十二年（二八二九）まで、京都は、宝永五年、享保十五年（一七三〇）、天明八年（一七八八）と、三度も歴史的大火を被っていた。<sup>52</sup>『京城勝覧』には、天明四年の改刻本があるものの、本文の内容にほとんど変化はなく、その上、この改刻が行われたのも、天明の大火より前になる。

鈴木章生氏が江戸の名所記について、明暦の大火を契機に変化したと指摘されているように、<sup>53</sup>火災による焼失と復興を経て変化した町並みを新刊の案内記が盛り込み、旧来のものと取って代わるのが自然な流れである。それにもかかわらず、新刊が続かなかつたのは、逆に、百年以上もの間、『京城勝覧』を筆頭に、『京内まいり』『名所車』の三書で事足りていたことを示すものであろう。繰り返された後印や改刻も、この三書の強い影響力を裏付けてくれている。

#### 四、『京城勝覧』の援用例

——浅加久敬『都の手ぶり』を中心として

浅加久敬（一六五七〜一七二七）、号は山井、六百石取りの加賀藩士で、徒然草の注釈書『徒然草諸抄大成』の著者として知られる。彼は、藩命を蒙って諸国を遊歴する機会が多く、本稿で扱う『都の手ぶり』を含めて、著名な能登紀行『三日月の日記』『能登浦伝』も、その際に編まれたものであった。擬古文調の和文に、和歌・狂歌・漢詩と、名所や伝承の考証を織り交ぜるといふ記述スタイルは、

表2

『都の手ぶり』の構成  
元禄十五年に追加された紀行は太字にした。「」は巻中見出しである。

冊次	年次	内題	内容
第一冊	元禄十年	都の手振り巻之上 ひなの道づれ	往路
	元禄十五年	追加 鄙の道連れなが歌 壬午紀行	金沢↓京都
第二冊	元禄十一年	都の手振り巻之中之一 九重のすさみ上	京都滞在記
第三冊	元禄十一年	都の手振り巻之中之二 九重のすさみ中	京都滞在記
第四冊	元禄十一年	都の手振り巻之中之三 九重のすさみ下	京都滞在記
第五冊	元禄十一年	越土産追加 壬午紀行 越の家づと	復路 金沢↓京都
第六冊	元禄十五年	九重のすさみ中之二追加「愛宕参」 さ并大原道の記 「八幡山道の記」	京都滞在記
	11	九重のすさみ中之三追加「天台の登山」	
	27		
	23		

文学性・史料的价值の両面で評価されている。<sup>54</sup>

久敬が京都を訪れたのは、元禄十年（一六九七）十月から翌年にかけての約一年と、その四年後の元禄十五年八月からの約二ヶ月で、現在、唯一国会図書館に所蔵が確認される『都の手ぶり』写本六冊は、この二度の旅を題材としている。内容は、往路「ひなの道づれ」、京都滞在記「九重のすさみ」、復路「越の家づと」の三部に分かれ、それぞれ元の一度目の紀行と、二度目の旅における「追加」がある。つまり、元々はじめの紀行のみがあったところに、後の紀行が「追加」という形で、挿入または別冊の増補がなされているのである。この複雑な構成に関しては、川平氏のご論稿における整理

があり、表2も氏作成の表をもとに、筆者が少々改編を加えたものである。<sup>(55)</sup>

ところが、表2からもわかるように、浅加久敬が京都を訪れたのは、『京城勝覽』の刊行よりも早い。しかし、『都の手ふり』の本文には、明らかに『京城勝覽』を参照した痕跡が見られる。例えば、次のような箇所である。第六冊「鞍馬詣道くさ井大原道の記」、鞍馬から小原にかけての記述であり、便宜上対応する箇所傍線をつけて記号を付した。<sup>(56)</sup>

○鞍馬町 民家おほし。茶屋食店あり。宿をかす。⑦木の目漬ならびに山椒の皮をうる。〔…〕○くらまより①小原にゆくには、鞍馬の②民家の前なる川をわたり、東の山をこえゆく。坂けはしからず。⑤薬王坂と云。④静原と云里をとをる。⑧長谷と云里も南に見ゆ。⑥公任の住りし所、朗詠谷とて有。静原の上を⑨八入の岡といふ。名所なり。その先の谷上に、むかしの⑦普陀落寺有しといふ。今はなし。しづ原より③ひきゝ坂をこえゆけば、左に江文のやしろあり。其前を過て小原にいたる。

〔京城勝覽〕下、二十丁裏〜二十三丁表

さて、鞍馬の里の茶店に腰かけ、餅酒はいふにや及ぶ、所に名を得し⑦木の目漬、山椒の皮などたうべて暫休らひ、是より

①小原へとこゝろぎす。⑦民家の前なる河をわたり、東の山をこえゆく。⑤薬王坂といふ。里民はやつこ坂とも、或はやこ坂ともいふなり。④静原の里にいたる。〔…〕又、⑨南の方に長谷の里見ゆ。〔…〕此あたりに⑧八塩岡といふ所あり。〔…〕又、⑥朗詠谷といふあり。古、大納言藤原公任卿、此所に閑居し給ひて、倭漢朗詠集を撰ぜられし所なり。又は御所谷ともいふとぞ。静原の北の方に普陀落山も近し。清原氏の建てられし⑦普陀落寺、はたして礎石のみ残りりとぞ。猶ゆきく〜て③ひきゝ坂をこゆれば、左に江文大明神の社有〔…〕その前を過て小原にいたる。〔都の手ふり〕十四丁裏〜十六丁裏

案内記と紀行文という記述態度のちがいが、『都の手ふり』の方が長い解説を施しているという差はある。進んでいるコースが同じなので、当然紹介される名所の順番が似てくることも、踏まえなければならぬだろう。しかし、特に⑨の「民家の前なる川（河）をわたり、東の山をこえゆく」や③の「ひきゝ坂を…」など、単語の選択や言い回しまで一致している点は偶然とは思えない。『都の手ふり』に沿って、もう少し続きを見てみよう。小原に着いてからの記述である。

○④寂光院 西の谷の中、草生といふ所にあり。⑤尼寺有。昔

⑧高倉院の後、のちに尼となりてこゝに住給ふ。建礼門院と号せし女院也。⑨其木像まします。⑩うしろに小なる御陵有。すなはち建礼門院の御はか也。⑪むかひの山は、即平家物語に書たる女院の、櫛、わらびつみに上り給ひし山也。をよそ夏は、此山中緑樹多<sup>おほく</sup>してうるはし。繁花を愛せず、緑陰を愛し閑淡にふける人は、此所に来り見るべし。

〔『京城勝覧』下、二十五丁裏〜二十六丁表〕

まづ⑫草生村の寂光院へまふでぬ。此寺は堀川院承徳年中に良忍上人の開基なり。本尊の地藏菩薩は聖徳太子の御作なり。其後、⑬高倉帝の中宮建礼門院徳子、世をのがれ尼になり給ひ、此院に入て崩し給ふ。⑭後の山に御墓あり。これより此所今に到りて⑮尼寺となり、山門の末寺となる。寺領三十石、本尊の前に⑯女院の木像あり。又、阿波内侍の木像といふもあり。ともにこれを拝す。又⑰むかひに見えたる山は、すなはち女院の櫛、わらびつみに上り給ひし山なり。をよそ此山中緑樹おほくしてうるはし。繁花を愛せず、緑陰を弄び閑院に耽る人は、此所に来り見るべし。比しも今は秋も半すぎぬれば、霧ふだんの香をたき、月常住の灯火をかゝぐとかゝれし。

〔『都の手ふり』十六丁裏〜十七丁表〕

同じく傍線を引き対応させたが、特に強調したいのは⑩の部分である。「むかひ」の「山は」、「女院の、櫛、わらびつみに上り給ひし山也（なり）」と、少しも変わらない。『京城勝覧』の引用にもあるように、『平家物語』「大原御幸」の話は当時も知られていただろうが、ここまで似た文が生まれることはないだろう。続く麗しい緑樹に関する文章も、『都の手ふり』が「夏は、」を抜き、「愛」という単語の繰り返しを避けて「弄び」に変更した以外は、ほぼ同文と見てよい。明らかに直接的な影響関係があると判断できるのである<sup>(5)</sup>。

ただし、この旅が行われたのは、元禄十五年（二七〇二）、『京城勝覧』の序が書かれる四年前であった。久敬が『京城勝覧』を参照して旅するのは不可能である。それならば、『京城勝覧』が『都の手ふり』を参照したのか、という話になるが、『都の手ふり』は刊行された訳でもなく、現存する写本も国会図書館蔵の自筆稿本ただ一本であるため、益軒がこれを読んだ可能性は非常に低い。第三の文献の存在を考えることもできるが、『京内まいり』の分析でも述べたように、『京城勝覧』は先行の地誌を利用するにしても、かなりの改編を加えていたので、第三の文献からここまで酷似した表現を得ることはできないだろう。ましてや『京城勝覧』の序が書かれる前に、本文だけが流通していたという根拠もない。しかし、両者の間には、確かな関連があるのである。

一つ考えられるのは、久敬が元禄十五年の旅の記録を、四年以上

の月日が経った後に増補・校正するに至り、その時に『京城勝覧』を参照した可能性である。『都の手ふり』には、名所に関する歴史・沿革・伝承などについて詳細な考証が施されており、引用文では省略したが、段を違えて注も頻出する。『雍州府志』『京羽二重跡』『京雀』をはじめとする地誌のほか、『顕注密勘』『源平盛衰記』など、引用される文献も多岐にわたっており、長年の調査を経たものであることがわかる。特に京都滞在記の部分は、名所が多いため、紀行の本文よりも注や考証部分の方が長い。二ヶ月という短い京都滞在期間に、詳細な考証と各地への遊覧、そして公務を同時に行うのは難しい。したがって、後から増補・校正を加えているとみるのが妥当である。その際に、紀行の本文に関しても、文章として練り直し、組み立てたと見てよいのではないだろうか。

それに、文章からも、久敬が『京城勝覧』を参照している様子を垣間見ることができ。先ほどの引用、④の部分で、緑樹に関して「夏は、」という言葉が削られていると指摘したが、それは、久敬がこの地を訪れた八月二十八日が、彼の言うように「秋も半すぎ」た頃であり、続く秋色の形容にそぐわないと考えたからだろう。あくまでも本人の旅の体験を記すのが目的であり、その修飾に『京城勝覧』の記述を援用しているのである。

紀行文は旅の記録であるが、同時にその経験をもとに作者の脚色がなされる創作文学でもある。久敬はその脚色の際に、様々な文献

を参照しており、そこに『京城勝覧』のようなモデルコース案内記が含まれていたとしても不思議はない。旅人は、モデルコースと全く同じように動いていなくとも、後に、訪れた名所につながるコースを辿っていけば、覚書に書き忘れた当時の記憶が蘇っただろう。買うにしても、貸本屋から借りるにしても、値段が手ごろで身近な実用書は、このような使われ方もあった。また、逆に実用に適していたからこそ、紀行文のあらすじを組み立てる際の参考になり得たとも言える。

ところで、久敬は何故、他の引用文献については記すのに、『京城勝覧』の書名を出していないのだろうか。実際、このような行為は、久敬だけに見られるものではない。上杉和央氏によると、森幸安も『山州撰』（十六卷十二冊、寛保元年（一七四一）成立）を編む際、巻第十二では『京羽二重』を、巻第十六においては『京城勝覧』を、かなり多く引用しているにもかかわらず、巻第一冒頭の著者自身が示した既存地誌の系譜に両書を計上していないという<sup>58</sup>。また、益軒も、『京城勝覧』序で、京都の参照文献について、「雍州府志、山城国志、名所追考」と三書の名を挙げたが、自分が執筆に利用した『京羽二重』については言及していない。

右のような例は、『京城勝覧』や『京羽二重』のような小型の実用書と『雍州府志』のような大部の総合的地誌の間に一線が画されていたこと、小型案内記は、地理的参照文献として挙げるには、ふ

さわしくないように認識されていたことをあらわしている。さらに、それにもかかわらず、実際には簡便な手引書として、総合的地誌と同様に盛んに利用されていたことも、示してくれている。<sup>(59)</sup> 本居宣長の研究には、彼の青年期における知識の形成に益軒の実用書の影響があり、地理においては、『京城勝覧』が大きく関わったという論稿がある。<sup>(60)</sup> 本稿も同様の視座から、要約簡便化された案内記の、携帯に便利という実地での「実用」性にとどまらない「実用」の例を紹介した。これを出発点に、小型案内記のより大きな役割を想定していくべきであり、今後のさらなる考察が待たれる次第である。

#### おわりに

以上、従来ほとんど取り上げられることのなかったモデルコース案内記について、『京城勝覧』を中心にその成立過程と後世に発展・継承されていく様相を示し、実用例を検討してきた。それは、自発的な遊楽の旅と地誌編纂活動が成熟する中、生まれるべくして生まれた形態であったが、すぐに模倣作が出るほど時好に投じた趣向でもあった。また、表面化されることは少ないものの、モデルコース案内記のような小型の実用書が、初歩的地理知識を担っていたことを念頭に置く必要がある。

最後に、日割・地区別コースの意義について、当時の時代背景に即して述べておきたい。近世の旅は、徒歩旅行が基本であったため、

長期にわたらざるを得ない場合が多く、時間はもちろんのこと、多額の費用も要した。そこで旅人は、どうしてもかさんでしまう宿泊費や食費を節約するため、夜明け前から日暮れまで早足で歩き、距離をかせぐ必要があった。しかし同時に、またとない機会なので、なるべく多くの見物をして帰りたい。目的は伊勢参宮であっても、江戸や鎌倉、奈良、大坂、京都など、名の知れた名所旧跡が集まっている名勝地には、少し遠回りしても寄るのが常であった。<sup>(61)</sup>

なかでも京都は、文化の中心で憧れの都市であったため、早くから集客力があり、二章で述べたように、人々は伊勢参宮の際にも必ずと言って良いほど立ち寄っていた。さらに、京都を目的地とした旅には、本山参りや西国三十三所巡りなどがあった。<sup>(62)</sup>

ただ、やはりゆつくり滞在することはできず、短期間に効率よくまわらなければならぬ。案内人を頼むという選択をしている旅人も多かったが、<sup>(63)</sup> さらに費用がかさんでしまう。能動的な旅人の需要に応えたのが、モデルコース案内記であった。まさに案内人の代わりになる本であり、日割コース、または地区別コースにおいて、できるだけ見残しがないよう、なるべく多くの名所に廻れるように工夫されていた。

限られた時間の中で、効率よくできるだけ多くの見物・体験をすること、これは、現代における観光の一特徴とも相通するだろう。ゆつくりすることに主眼を置いた温泉観光やリゾート滞在を除けば、

現代の観光客が求めているものも、効率的に見残さないことであり、それが実行できるように、ワンデープランや地域周遊モデルコースが参照される。江戸時代中期、各地で既に「観光地」化のような活動がすすめられる一方で、旅案内記においても、「観光ガイド」化が起きていたのである。

西洋において観光が定着するのは、海浜リゾートが発達し、トーマス・クックなどによる旅行業が誕生した十九世紀以降であり、また、本格的な観光ガイドブックが出版されるのも、一八三六年に出版を開始したジョン・マレーの「赤表紙叢書」以降とされる。<sup>(64)</sup>世界的に比べても、日本の観光文化は早期に成熟していた。十八世紀初めに登場したモデルコース案内記は、それを如実に示してくれている。

\*引用に際しては、原則として常用漢字、現代仮名づかいを用い、適宜句読点を加えた。原文のルビは、省略している箇所がある。また、原文が漢文の場合は、筆者が書き下しにした。

## 注

- (1) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、一九八二年）第六章、六九九〜八五一頁参照。
- (2) 一例を挙げると、貝原益軒は、福岡藩儒の公務のため、江戸藩邸と福岡を往復する機会が何度もあった。貞享二年（一六八五）三

月、彼は常日頃利用していた東海道のかわりに中山道を利用する承諾を得、日光や足利学校、佐野明神などの名所に立ち寄り、『東路記』という紀行文を残している。

- (3) 本稿で用いる「名所」とは、案内記において、項目として立項されている場所や建造物を指す。本稿で扱っている京都・奈良の案内記の場合、「名所」はほぼ神社と一致している。鈴木章生氏も、立地・宗教・歴史・世俗などの要因から、神社と名所は重なることとされている。（『江戸の名所と都市文化』（吉川弘文館、二〇〇一年）一〇七〜一〇八頁）そして、文化庁（編）『信仰・社会生活』（日本民俗地図三、国土地理協会、一九七二年）の六十二〜六十六番「講」の地図から、伊勢講・富士講・金比羅講・善光寺講など、様々な講がほぼ全国的に分布していたさまを窺うことができる。

- (4) 武陽隠士『世事見聞録』（文化十三年（一八一六）序刊）巻の五「諸町人の事」、原田伴彦（ほか編）『見聞記』（日本庶民生活史料集成八、三一書房、一九六九年）所収、七一〇頁。

- (5) 金森敦子『伊勢詣と江戸の旅―道中日記に見る旅の値段―』（文春新書、文藝春秋、二〇〇四年）二四〜二六頁参照。

- (6) 林屋辰三郎（ほか編）『近世の展開』（京都の歴史五、学芸書林、一九七二年）二九七頁。

- (7) 宮崎ふみ子、ダンカン・ウィリアムズ「地域からみた恐山」『歴史評論』第六二九号（校倉書房、二〇〇二年九月）六〇〜七二頁。

- (8) 阿諏訪青美『中世庶民信仰経済の研究』（校倉書房、二〇〇四年）五一〜五七頁。応永二十六年（一四一九）の案件であるため、

近世の例ではないが、既にその頃から民衆による参詣が盛んに行われていたことになる。

(9) 青柳周一「富嶽旅百景―観光地域史の試み―」(角川叢書二十一、角川書店、二〇〇二年) 六七〜七〇頁。

(10) 「モデルコース」の語と、後出する「日割」「地区・方角別」は、山近博義「京都もの」小型案内記にみられる実用性(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会(編))『地図と歴史空間―足利健亮先生追悼論文集―』大明堂、二〇〇〇年、三六一〜三七二頁)に倣った。

また、「観光」について、この言葉が登場するのは近代以降であり、本来ならば、それに該当する「物見遊山」「漫遊」「遊覧」などの語を使用すべきであるが、青柳周一「富嶽旅百景」(前掲書、注9)をはじめ、先行研究でも既に行なわれている語であるため、本稿でも使用している。

(11) 貝原益軒『京城勝覧』(茨城多左衛門、宝永三年(一七〇六)序、享保六年(一七二二)刊、二冊、東京大学総合図書館蔵〔J三〇/三八九〕六丁裏。

(12) まずは、名所記方面からの研究に、矢守一彦『古地図と風景』(筑摩書房、一九八四年)七一〜七四頁がある。また、菅井聡子「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間―類型化と編纂史の分析を通して―」(『地域と環境』二、京都大学大学院人間・環境学研究科「地域と環境」研究会、一九九九年三月、二九〜三九頁)は、『京城勝覧』などを「遊歩モデルコースを示すもの」としている。道中記方面からの研究では、今井金吾「江戸の旅風俗―道中記を中心に―」(大空社、一九九七年)が詳しい。

(13) 山近博義「案内記類にみられる近世京都の諸相―名所記と小型案内記―」(『人文地理』四十八―四九号、人文地理学会、一九九六年八月、九三〜九四頁)、「近世奈良の都市図と案内記類―その概要および観光との関わり―」(奈良女子大学地理学研究報告)五、奈良女子大学文学部地理学教室、一九九五年三月、一四三〜一七三頁)、「近世名所案内記類の特性に関する覚書―「京都もの」を中心に―」(『地理学報』第三十四号、大阪教育大学地理学教室、二〇〇〇年、九五〜一〇六頁)、「京都もの」小型案内記にみられる実用性(前掲論文、注10)など。

(14) 本稿は、山近氏の扱う案内記に、表1の④⑤⑦を追加し、池田東籬著『京名所道案内』(天保十二年(一八四一)刊)は、未見のため考察対象としていない。山近氏は、『京名所道案内』と表記されているが、天保十二年に刊行された池田東籬著の案内記の題名は、『京名所道案内』である。

(15) 大宰春台『経済録』(享保十四年(一七二九)刊)巻四「地理」(滝本誠一編『日本経済叢書』巻六、日本経済叢書刊行会、一九九四年所収)、九九〜一〇〇頁。

(16) 会津藩『会津風土記』、広島藩『芸備国郡志』、熊本藩『国郡一統志』、水戸藩『常陸国風土記』などが挙げられる。白井哲哉「日本近世地誌編纂史研究」(思文閣史学叢書、思文閣出版、二〇〇四年)三五〜五〇頁参照。

(17) 『古地図と風景』(前掲書、注12) 七一〜七四頁。

(18) 本稿は、対象を「京都もの」に限定していないが、表1から分かる通り、モデルコースの案内記は、京都と奈良に集中している。

その理由は、大都市江戸を例外として、日光や善光寺など、他の名勝地は見物に日数を要せず、日割や地区別に区切る必要がないからだと考えられる。一箇所の「地区」をめぐる案内記には、例えば、『播磨巡覧記』（明和九年（一七七二）刊）、『日光山名跡誌』（享保十三年（一七二八）刊）などがあり、上方以外にも存在する。

(19) 菅井聡子「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間」（前掲論文、注12）三一頁、山近博義「京都もの」小型案内記にみられる実用性」（前掲論文、注10）三六二頁など。ただし、山近氏は右の論稿の注8において、『京城勝覧』は序文が宝永三年となっているため、必ずしも『京内まわり』がこのジャンルの嚆矢というわけではない」とされている。

(20) 岩波書店編『国書総目録』全八巻補遺二巻（岩波書店、一九六三〜一九九〇年）に「宝永八版」とある宮城県立図書館蔵本は、実際は宝永八年版ではなく、宝永三年序、刊年不明の誤記である。また、「享保三版」とある高木文庫蔵本は、高木利太著『家蔵日本地誌目録』（高木利太、一九二七〜一九三〇年）一四〇頁に「家蔵本奥付を失し発刊年書肆不明であるが、別本により其初版が享保三年刊行なることを知る、此蔵本印字鮮明で且後板と文字画風の異なるところを見れば多分享保三年板と思はれる」とあって、高木氏の言う「別本」が何を指すのかわれず、これもまた刊年不明と見るほかない。

(21) 東京大学総合図書館蔵の『筑前名寄』（丁四〇／二八七）や『大和俗訓』（B四〇／一〇六八）の最終丁に「貝原先生編述目次」「享保二丁西歳平安六角御幸町書林柳枝軒蔵版」があり、「京都めぐ

り」の書名が見える。

(22) 「書翰集（下）」（九州史料刊行会編『益軒資料』九州史料叢書、九州史料刊行会、一九五五〜一九六一年所収）五巻、六四頁。

(23) 『国書総目録』（前掲書、注20）には、「宝永五年版」も載せられていて、筆者は確認できていない。『大和俗訓』には「宝永五年立冬日」（一七〇八年十月）の益軒自序があり、たとえ宝永五年に自序を含まず刊行されていたとしても、翌年の宝永六年にそれを加えて再刊されたはずである。

(24) 早稲田大学古典籍総合データベース掲載の茨木太左衛門宛、益軒書簡による（チ03 03816 0002）。年度不明の十月十五日付であるが、益軒が自分の年齢に言及していて、宝永六年（一七〇九）の書簡であることがわかる。前述したように『大和俗訓』は、宝永六年六月の刊本があり、それを九月三日に受け取った旨が書かれている。

(25) 「寺院部」との表記はないが、後に「神社部」が続くので、おそらく「寺院部」を書き落としたものだろうと思われる。『京内まわり』三十一丁裏〜四十四丁表。

(26) 野間光辰（編）『新修京都叢書』（臨川書店、一九六七年、再版、一九七六年）第十二巻、八頁。

(27) 『都すゞめ案内者』（正徳五年（一七一五）刊）の三条の項目には、宿屋の名前が並ぶ。「都すゞめ案内者』『新修京都叢書』（前掲書、注26）第三巻所収、七二頁。

(28) 「七ざい所巡道しるべ」（今井金吾監修『道中記集成』大空社、第十九巻、一九九六年所収）三六五〜三六六頁。

(29) 林宗甫著のものとは別本である。『国書総目録』（前掲書、注

20) によると、本書の別書名は、「大和国奈良並国中寺社名所旧蹟記」とあるが、所見本の巻頭書名は、「大和国奈良並国中寺社名所旧蹟記」である。

(30) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―」(『人文地理学研究』十四、筑波大学地球科学系、一九九〇年三月、二三一―二五五頁)は、分析対象としている八十一名の道中記を全て、①伊勢参宮後に西国巡礼ルート、②伊勢参宮後に奈良・大坂・京都の社寺を巡るルート、のいずれかに分類する。つまり、伊勢はもちろん、西国巡礼二番札所の紀三井寺より望める歌枕(和歌浦)、そこから奈良までの道筋にある(高野山)も一連のルートに含まれていたと見ることができ、本書の巻末に付された内容は、当時の実情に沿っていたと言える。尚、このような伊勢参宮ルートは、山近博義氏の指摘にあるように、「遠国から来寧する場合に顕著な傾向ではあるが、近国からの場合でも、徒歩交通が主であることから、十分にあり得る傾向である」(『近世奈良の都市図と案内記類』〔前掲論文、注13〕一六八頁)ことも、付け加えておきたい。

(31) もっとも、東海道の道中記『東海道巡覧記』(延享三年(一七四六)刊)は、『都名所道案内』よりも早くから記号を使い分けていた。「●」が一里塚、「▲」が上り下り両用の立場の記号であった。今井金吾『江戸の旅風俗』(前掲書、注12)一三二頁。

(32) 同じ東籬著『天保改正花洛名所記』の凡例には、「名所案内もつばら鄙人のためにすれば、日数わづか六日をかぎり」とするとあって、東籬が地方からの旅人を読者として想定していたことがわか

る。『天保改正花洛名所記』は、⑨『京都順覧記』の二冊目だけを抜き出した改題本である。

(33) 「京都もの」小型案内記にみられる実用性」(前掲論文、注10)三六八―三六九頁参照。

(34) 益軒の日記による。日記は、『益軒資料』(前掲書、注22)一―二巻所収本を参照した。

(35) はじめ甥の貝原好古が編述し、好古の没後は弟子の竹田春庵がその任を継いだ。正徳二年(一七一二)六月二十日の益軒による春庵宛書簡に、この年譜の改正を謝す内容があるので、その内容の信憑性は高い。川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜』(文献出版、一九八二―一九八七年)所収、七巻中、二三〇―二六二頁。春庵宛書簡は同書同巻の三四五頁。

(36) 『家蔵書目録』『益軒資料』(前掲書、注22)所収、七巻、四一―四五頁。

(37) いくつか例を挙げると、元禄元年九月六日、十一月十日、十二月二十二日、元禄二年閏一月四日などに見られ、益軒が訪ねる場合もあれば、道祐の訪問を受けることもあった。

(38) 『雍州府志』の引用には、『新修京都叢書』(前掲書、注26)第十巻所収本を使用した。

(39) 『京羽二重』の引用には、『新修京都叢書』(前掲書、注26)第二巻所収本を使用した。

(40) 神宮文庫蔵『公私書目』所収。以下の翻刻を利用した。大庭脩『神宮文庫蔵貝原益軒『公私書目』』『皇学館論叢』三十二巻二号、皇学館大学人文学会、一九九九年四月、六〇―八一頁。

(41) 「玩古目録」の引用は、「補遺」(『益軒資料』(前掲書、注22)七卷所収)四〇三九頁によった。

(42) 『鎌倉志』に関しては、以下の文献に詳しい。①鈴木暎一『徳川光圀』新装版人物叢書二四四、吉川弘文館、二〇〇六年、一二三〜一二七頁。②白井哲哉「近世鎌倉寺社の再興と名所化」青柳周一・高埜利彦・西田かほる(編)『地域のひろがり』と宗教』(『近世の宗教と社会』巻一、吉川弘文館、二〇〇八年)所収、二七一〜二九六頁。③原淳一郎「寺社参詣における書物の機能―鎌倉参詣と『新編鎌倉志』、白幡洋三郎(編)『旅と日本発見・移動と交通の文化形成力』(日文研叢書四十三、国際日本文化研究センター、二〇〇九年三月)所収、九一〜一〇七頁。

(43) ここでは、早稲田大学古典籍総合データベース掲載本を利用した。全九冊、貞享二年(一六八五)序の柳枝軒刊本である。

(44) 注42に挙げた『鎌倉志』関連の三文献には触れていない。

(45) 一例として、菊枝楼繁路と号する大瓜村寺崎屋敷の阿部林之丞は、文政六年(一八二三)正月から四月まで伊勢・金比羅詣をしたときに、宮沢氏なる人の記した道中記を懐にして旅をつづけ、繁路自身も見聞したことを旅日記に書きとめている。繁路の『伊勢参宮旅日記』は、石巻市史編さん委員会(編)『石巻の歴史』第九巻(資料編3 近世編、石巻市、一九九〇年)所収、資料番号四一三。

(46) 一例ずつ挙げると、「新黒谷」では『京董』を、「百万遍」では『京羽二重』を利用している。新黒谷(『京内まいり』八丁裏、「京董」『新修京都叢書』(前掲書、注26)第一卷所収、五一〜五二頁)。「百万遍」(『京内まいり』六丁裏、「京羽二重」(前掲書、注39、一二

〇頁)。

(47) 他にも、新黒谷、真如堂、鹿谷万無寺、南禅寺、知恩院、祇園社、丸山安養寺、長楽寺、六道、六波羅密寺、霊山、大仏、東福寺、平野社、今宮社、愛宕山、高尾山、岩屋山、鞍馬寺、比叡山、石清水八幡宮、離宮八幡(「名所車」の順番に沿って記した)などで全文及び一部流用が見られる。

(48) 「洛陽名所集」は、『新修京都叢書』(前掲書、注26)第十一巻所収本を参照した。

(49) 「京羽二重」には、通りごとに「此通諸職人商家」などが挿まれているが、これを抜かせばほぼ同文になる。

(50) 高橋陽一「多様化する近世の旅―道中記にみる東北人の上方旅行―」(『歴史』九十七号、東北史学会、二〇〇一年九月、一〇五〜一三三頁)は、一六九一年〜一八六八年の道中記七十六点をもとに検証されているが、「京都に一度も立ち寄らず旅を終えている例は発見できなかった」(二二〇頁)という。また、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷」(前掲論文、注30)の分析史料となった八十一の道中記でも、京都に寄らない例は見当たらない。

京都での滞在日数については、前記論稿のほか、桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」(『駒澤史学』三十四号、駒澤大学史学会、一九八六年一月、一四四〜一八一頁)、小松芳郎「道中記にみる伊勢参詣―近世後期から明治期を通して―」(『信濃』三十八巻十号、信濃史学会、一九八六年、一三〜三〇頁)も参照した。

(51) 他に、三十三間堂、智積院、六角堂、新玉津島、四ツ塚、桂川、法輪寺、野々宮、妙心寺、竜安寺、鞍馬寺、東照宮、東福寺などに

見られた。

- (52) 林屋辰三郎（ほか編）『伝統の定着』（京都の歴史六、学芸書林、一九七三年）六〇～六三頁。
- (53) 『江戸の名所と都市文化』（前掲書、注3）九四～九五頁。
- (54) 以上、浅加久敬については、藤島秀隆「浅加久敬と『三日月の日記』—国学者の旅」（『日本学研究』三卷、金沢工業大学日本学研究所、二〇〇〇年六月、七一～八八頁）、川平敏文「浅香久敬—元禄加賀藩士の前半生」（『語文研究』第九十号、九州大学国語国文学会、二〇〇〇年十二月、一～一五頁）、同氏「浅香久敬—元禄加賀藩士の後半生」（同誌、第九十一号、二〇〇一年六月、二二～三七頁）を参照した。尚、浅加は「浅香」と表記することもある。
- (55) 「浅香久敬—元禄加賀藩士の後半生」（前掲論文、注54）二三頁の「へ表」。筆者が丁数と「」の巻中見出しを加え、内容の「在京都」を「京都滞在記」に変更した。
- (56) 『都の手ふり』の引用は、国立国会図書館蔵本による。書型は二七×一七センチメートルの大本、全六冊（合三冊）である。引用に際し、段違いの注は省略し、適宜句読点を加えた。
- (57) ほかに、『都の手ふり』第六冊と『京城勝覧』の影響関係を示す箇所は多数ある。引用部分の『都の手ふり』「鞍馬詣道くさき大原道の記」（表2参照）の前半が『京城勝覧』第十三日「鞍馬山にゆく道」、後半が第十四日「小原にゆく道」、「愛宕参」が第七日「嵯峨にゆく道」の「釈迦堂」までと第八日「愛宕山にのぼる道」、「八幡山道の記」が第十日「八幡山にゆく道」と第十二日「鳥羽より山崎にゆく道」の一部分、「天台の登山」が「拾遺」にある「松

が崎」への道と、第十一日「比叡山にゆくみち」に似ている。

- (58) 上杉和央「地誌作成者としての森幸安」（『歴史地理学』四十七・四、歴史地理学会、二〇〇五年九月、二二～二四頁）。
- (59) 文学においても、浅井了意『東海道名所記』や十返舎一九『道中膝栗毛』で道中記の利用が確認されている。岸得蔵『道中記』『丙辰紀行』『東海道名所記』（『仮名草子と西鶴』成文堂、一九七四年、三一～四二頁）、中村幸彦（校注）『東海道中膝栗毛』（新編日本古典文学全集八十一、小学館、一九九五年）「解説」五二八～五二九頁参照。
- (60) 小山内めぐみ「本居宣長と「貝原先生」—松坂修学期における一側面—」（『鈴屋学会報』三三号、鈴屋学会、一九八七年、二一～三二頁）、上杉和央「青年期本居宣長における地理的知識の形成過程」（『人文地理』五十五・六、人文地理学会、二〇〇三年、一八～三九頁）。
- (61) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」（前掲論文、注50）の「第5表」参照。
- (62) 京都が憧れの都市であったことを含め、本山参りに関しては、鎌田道隆「京花の田舎」（記録・都市生活史八、柳原書店、一九七七年）一三九～一五一頁に詳しい。
- (63) 高橋陽一「多様化する近世の旅」（前掲論文、注50）で、京都での行程が知れる三十五例中、案内を頼んだのが十四例、頼んでいないのが二十例、不明一例である。一二二頁の「表4」を参照した。
- (64) 小池洋一、足羽洋保（編著）『観光学概論』（ミネルヴァ書房、一九八八年）一六～二二頁、吉見俊哉「観光の誕生」（山下晋司編

『観光文化学』新曜社、二〇〇七年、八〇―一三頁）参照。ガイドブックについては、北川宗忠『観光と社会―ツーリズムへのみち―』（サンライズ出版、一九九八年）七一―七三頁参照。